

(要約版)

東北地方の農作業時における「たばこ休み」の意義と変遷

助成研究者 松本 祥子 (東北福祉大学・家族社会学)

1. 目的

東北地方の中でも宮城県全域、岩手県と秋田県の一部において稲作を主軸とする農家では、農作業の合間にとる休憩のことを「たばこ休み」と呼称している。「たばこ休み」とは、春は育苗・田植、夏は草取り、秋は稲刈りといった作業中にとる休憩のことである。

大正末期から昭和初期の食生活を紹介した研究の中では、この「たばこ休み」でどのような食物が供されていたか示してある。しかし、それは軽食の内容を付すにとどまる。

「たばこ休み」は、それをとるタイミング、そこに居合わせる人々の顔ぶれ、食物の内容も時間の経過と共に変化している。この「たばこ休み」の変化は農村社会の変容に呼応している。

本研究の目的は、「たばこ休み」を手がかりとして農村社会の変化を明らかにすることである。

2. 方法

調査対象地である宮城県大崎市田尻通木地区は、宮城県北部に位置する大崎平野のほぼ中央の沃土地帯にあり、稲作を主軸として農業が行われてきた地域である。

報告者は、1999年より宮城県大崎市田尻において、農家家族の家族調査に取り組んできた。本研究では、その研究を基盤として集落生産組織「HI-SOFT21」に加入する農家15戸(専業2戸・兼業13戸)を対象とし、2010年6月から11月までの間に「たばこ休み」についてインタビューを実施した。インタビュー対象者は、各対象農家の既婚女性とした。そのため、同一家族内の複数の女性にもインタビューを行い、インタビュー総数は24名となった。

調査内容は、田植のときの「たばこ休み」を開始する時間、どのくらいの時間を確保したのか、朝から夕方までに何回「たばこ休み」をとったのか、休憩場所、食物、「たばこ休み」を言い出す人、その準備をした人についてである。その際、対象者の結婚時から現在までの「たばこ休み」についての聞き取りを中心に据え、生活史、家族内役割分担、農業経営状況についても聞き取りを行った。

調査方法は、質問紙票を用いた面接法とし、育苗、田植、稲刈りのときなどには、参与観察を行った。

3. 結果・考察

「たばこ休み」を休憩するときの顔ぶれ、休憩時間の取り方(開始する時間・経過時間・曜日)、食物から整理し、それらを田植機所有にみる田植作業と照らし合わせてみると次頁のようにI期からIV期となる。

I 期〔手作業／曜日に関係なしに午前・午後の 2 回／家族と親戚／手作り（ハレ）〕

1960 年代までの田植は手作業で行われており、家族以外の人手を必要としていた。そのため、「たばこ休み」は、田植が終わるまで曜日に関係なく、1 日に 2 回、家族と手伝いに来た親戚とともにとっている。その際、午前の「たばこ休み」では、その地域における煮物、もち、といったハレの食物をとっている。そのことから「たばこ休み」が単なる休憩としてだけではなく、絆を深めるといった特別な場であったと言える。

II 期〔機械化（個別）／土・日の午前 1 回／家族のみ／手作り（日常）〕

1970 年代に入ると各農家に田植機が普及し、重労働が軽減され、稲作作業はスピード化が図られた。そのため、親戚の手伝いを必要としなくなり、家族のみで「たばこ休み」をとるようになる。そのため手作りのおにぎり、漬物など日常の食物をとるようになる。また、兼業農家が多くなったことから、週末に田植作業をするため、土・日に「たばこ休み」をとるようになる。

III 期〔機械化（個別）／土・日の午前 1 回／家族のみ／スーパー等で購入した物〕

1980 年代から 1990 年代の「たばこ休み」は、II 期と同様に兼業農家が多いため、週末に田植作業を個別に行っている。「たばこ休み」のときの食物は、II 期とは異なりスーパーで購入した、おにぎり、パンなど日常の食物をとっている。

IV 期〔機械化（集団）／曜日関係なしに午前・午後の 2 回／「HI-SOFT21」の作業担当者／スーパー等で購入した物〕

2000 年代になると各農家は稲作作業の省力化を図るため集落生産組織「HI-SOFT21」に加入する。「たばこ休み」はローテーションで決められた日時に田植作業をしている作業担当者とその妻らが、スーパーなどで購入した、おにぎり、パン、せんべいなど日常の食物をとっている。

このように田植機所有にみる田植作業の変化を踏まえて「たばこ休み」を捉えると、上記の 4 期にわたっての「たばこ休み」の変化は、農村社会の共同性の変化を映しだしていると推察することができる。

I 期は家族の他に親戚の助力を得て田植を行っており、「たばこ休み」ではハレの食物を一緒にとっている。そのことから I 期の「たばこ休み」からは親戚との共同性がみられる、と言える。II・III 期になると田植機が普及し、各農家で作業を進めるようになる、家族のみで「たばこ休み」をとっており、親戚との共同性は消失する。同時に「たばこ休み」の食物は日常の物となる。しかし、IV 期になると「HI-SOFT21」という地縁に基づく農家と一緒に作業をするようになったことで「たばこ休み」に共同性がみられるようになる。つまり一度、消失した共同性は家族と農業事情により、地縁に基づいた他家との共同性を再生する。しかし、「たばこ休み」の食物は日常の物をとっていることから考えると、地縁に基づく共同性は作業の効率化を求める集団にすぎず、信頼関係が重要視されていないことになる。それを補うように田植終了後、「さなぶり」を行っているととも考えられる。

以上のことから農村社会の共同性の変遷によって、「たばこ休み」の意味づけも大きく変わっていった、ということが出来る。